

令和 5 年 5 月 25 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12947

研究課題名（和文）ミャンマーのパオ仏教瞑想についての研究

研究課題名（英文）On Pa-Auk Buddhist Meditation Lineage in Myanmar

研究代表者

川本 佳苗（Kawamoto, Kanae）

東京大学・東洋文化研究所・特別研究員

研究者番号：40781688

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：2019年度では、ミャンマー現地調査および国内調査を行い両国の瞑想実践の場への参与観察・インタビューを開始した。調査報告として国際学会ICAS（オランダ）と日本宗教学会、宗教社会学の会で口頭発表した。平行してミャンマーで収集した文献の翻訳、インタビュー内容の翻訳と文章化を行った。2020年度以降、新型コロナウイルスの感染拡大と政情不安により渡航制限を受け、ミャンマーでの調査を中止した。それに伴って一部直接経費を国内調査用に変更し、期間も1年延長してパオ瞑想を実践する日本人の国内調査に焦点を当てた。2020年10月、「パオ瞑想法におけるサマタ瞑想」（『サンガジャパン』36号）を出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、上座部仏教社会の動向との関連から「瞑想とは何か」という問いに答えを提示しようと試みた点にある。第一に、現在、仏教瞑想として関心を集めるマインドフルネスではなく、その大衆化に至る歴史的過程において周縁化された禅定という実践に注目した。第二に、禅定の実践が復興しつつある潮流にも注目し、禅定を修行する者が得ている集中力や心の静けさといった精神的価値が現代社会において不足し、だが必要とされるものであるからこそその復興であるという原因を分析した。仏教文献研究だけでなく現地調査にも基づく本研究は、瞑想と社会との関わりおよび現代社会における瞑想の効果という社会的意義にも貢献した。

研究成果の概要（英文）：In FY2019, I began both a field research in Myanmar and domestic ones in Japan, and began for observation and interviews. I presented the report at the international conferences ICAS in the Netherlands, the Japanese Association for Religious Studies, and also a workshop by the Research Group of Religious Sociology. I also translated part of printed publications that I had collected in Myanmar and transcribed the interview record of Burmese for translation.

Since FY2020, due to travel restrictions imposed by the spread of the new coronavirus and political uncertainty in Myanmar, the field research was discontinued. In October 2020, I published the outline of Pa-Auk meditation as the article "Samatha Meditation in the Pa-Auk Meditation Technique" (Sangha Japan, No. 36).

研究分野：宗教人類学

キーワード：ミャンマー 上座部仏教 瞑想 マインドフルネス パオ瞑想 ヴィパッサナー 禅定 サマタ

1. 研究開始当初の背景

本研究の問題関心は、仏教教理と瞑想実践との関係にある。上座部仏教の瞑想実践という宗教文化は、それが実践される社会の動向と無関係に語ることはできない。ミャンマーにおいても同様に、第一次大戦後に政府の後援下で瞑想センターという宗教施設が制度化されてきた。それ以降、これまで僧院で限定される修行であった瞑想が、「ヴィパッサナー」として在家仏教徒にも可能な実践として開かれる。

やがてヴィパッサナーはミャンマー政府に推進されて世界に展開していく (Houtmann, 2014)。その背後で深い集中の状態である禅定を目指すもう一つの瞑想法であるサマタ (samatha) は、仏典に仏陀と仏弟子が度々禅定を実践したという記述が残るにもかかわらず周縁化していった。

ヴィパッサナーがミャンマーの歴史的な高僧レディ・サヤドー (1846~1923) によってパーリ聖典の『論蔵』の簡略的な解釈から形成されたという経緯は、ブラウンの先行研究によって分析された (Braun, 2013)。さらに、レディ以降も現代に見られる瞑想実践の実態は、人類学において研究されている。ミャンマーの政治社会と瞑想運動との関わりや (Jordt, 2007)、上座部仏教の文化として瞑想が実践者に与える影響が考察されてきた (Cassaniti, 2018)。

人類学の研究は、現代東南アジアの生きた瞑想実践を鮮やかに描き出すことに成功してきた。しかし、例えば実践への微細な影響であっても、実践の基盤となる教理・思想を追究するためには、やはり文献研究が不可欠なのである。この作業は仏教学側からしか行えないにもかかわらず、仏教学は依然として文献研究に偏向し、文献読解の強みを生かして瞑想実践を教理と照合して解釈するといった試みをしてこなかった。必要なのは、現代仏教研究に対して文献研究と人類学との間に見られる断絶に架橋することである。とりわけ、政治的背景の中で二極化・優劣化されたミャンマーの仏教瞑想の実態を仏教思想の文脈において丁寧に分析していくことを通じて「仏教徒にとって瞑想とは何か」を問い直すことにある。ここにこそ、教理と実践の関わりを総合的に読み解く現代仏教学の意義と可能性があると考える。

2. 研究の目的

本研究では「サマタ瞑想の復興による仏教の原点回帰」という問題に注目する。その具体例として、現代ミャンマーにおいて禅定の修得というサマタ瞑想を必須の実践であると主張する高僧パオ長老 (1934~) の瞑想法を分析することによって、なぜ周縁化されていた禅定が復興するに至ったのかという原因と、復興に影響を与えた現代社会や人々との関わりを明らかにする。

3. 研究の方法

パオ僧院はミャンマー南部のモーラマインに本山を構え、本山では国内外から常時約 1,000 人が修行する。日本では 1998 年より有志団体「はらみつ法友会」がパオ僧院の指導者による瞑想合宿を毎年複数回、企画運営しており毎回のべ約 50 人が参加する。

これらの瞑想実践の場への参与観察と聞き取り調査を通じて、なぜパオ仏教瞑想実践者が禅定を必須であるとするのか、実践者が獲得を目指して修練している集中力というものをどのように考えているのか、禅定修行によってどのような精神的变化を経験しているのかといった問いを明らかにする。調査資料は文章化・データ化される。

文献調査としては、まず、パオ瞑想の論拠となるパーリ仏教文献である『清浄道論』と『論蔵』の該当箇所を翻訳する。次にパオ長老の瞑想指導書などの出版物を分析して、長老の仏典解釈と瞑想への応用などを理解する。

4. 研究成果

本研究の結果、以下のような問題点が浮かび上がった。

第一に、ミャンマー人と日本人とは、パオ仏教瞑想を実践するに至った動機・過程が大きく異なるという問題である。ミャンマー人にとって上座部仏教の伝統は社会に根付いた自然な存在である一方で、日本人が上座部仏教と出会うまで、精神的クライシスの経験から精神世界や宗教に関心をもった遍歴を経てきた。つまり、日本人にとって上座部仏教に傾倒することは一種の改宗行為なのである。この人生の転換ともいえる心理的变化について、さらにインタビューを続けてデータを収集したいと考えている。

第二に、パオ瞑想の実践動機という問題である。日本人実践者の多くが他の瞑想法を一定期間経験したことがあるが、その瞑想法に不足を感じてパオ瞑想へと瞑想法を変更した。転向の動機は必ずしも深刻なものばかりではないが、背景にはパオ瞑想の特徴である集中力への尊重が見られ、集中力がもたらす恩恵として心の平安や清浄などが挙げられる。今後も日常におけるそのような恩恵を実感した体験をさらに聞き取り、仏典での解説と照合していきたい。

第三に、実践者の禅定が正統な仏教修行であるとする信頼は、必ずしも自身の仏典理解に基づくものではないという問題である。インタビューを通じて、多くの実践者がまだ禅定を経験していない状況下において、彼らの禅定への高い信頼は主に指導者の説く指導内容や法話に基づ

いていること明らかになった。そのため指導者の仏典解釈や自身の禅定経験に関するインタビューを増やす必要があると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 川本佳苗	4. 巻 36
2. 論文標題 パオ瞑想法におけるサマタ瞑想 心を照らす光明	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 サンガジャパン	6. 最初と最後の頁 208-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Kanae Kawamoto
2. 発表標題 Renaissance of Concentration Practice: Another Modern Buddhist Meditation Movement by the Burmese Monk Pa-Auk Sayadaw
3. 学会等名 International Convention of Asia Scholars (ICAS) 11 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kawamoto, Kanae
2. 発表標題 Happiness of Concentration: On the Japanese Practitioners of Pa-Auk Buddhist Meditation Derived from Myanmar
3. 学会等名 International Convention of Asia Scholars (ICAS) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川本佳苗
2. 発表標題 ミャンマーのパオ仏教瞑想を実践する日本人の体験と宗教的效果
3. 学会等名 日本宗教学会第78回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川本佳苗
2. 発表標題 ミャンマーのパオ仏教瞑想を実践する日本人の宗教観
3. 学会等名 宗教社会学の会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川本佳苗
2. 発表標題 上座部仏教の魅力：戒律と瞑想の世界
3. 学会等名 アジア交流史研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>1. 川本佳苗. 「ミャンマーの仏教瞑想について」. 京都大学アカデミックデイズ2021. https://research.kyoto-u.ac.jp/academic-day/a2021/a2021-p008/</p> <p>2. 川本佳苗. 「ミャンマー仏教の魅力：戒律と瞑想の世界」. NGOパルシック < ~知る・繋がる~ミャンマー連続講座 > 第4回講座. https://www.parcic.org/news/events/20048/</p>

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------